東日本大震災被災地応援部門　たより

轍わだち

２０２５．９．１１　NO．１７９

９月は防災月間です：夏休みに防災センターへ！

ユネスコ部の高校生２人と中学生３人は、７月 12 日に**阿倍野防災センター（通称：阿倍野タスカル）**へ赴き、防災体験をしました。冒頭は南海トラフ地震が発生したら大阪の町はどうなってしまうのか、シアターで予想シーンを見ました。①火災が起きたらどうするか、②津波が来たらどうするか、③安全な場所まで避難するのにどのようなことに気をつければいいのか、大事な説明を聞きました。

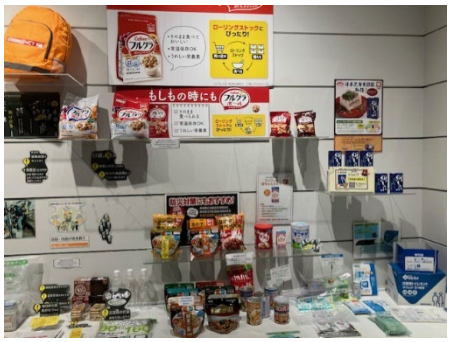
とくにシュミレーターで、阪神淡路大震災（1995 年）の突き上げるような揺れ、東日本大震災（2011 年）の長く大きな揺れを体験できたことはおおきな印象だったようです。学校が始まり、通学中や授業中に地震がおこることも考えられます。９月は「防災月間」ですから、皆さんのご家庭でも地震が起きたらどうするかよく話し合っておきましょう！防災意識の向上に努めましょう！

※煙は発生から短時間で充満するので、口を押さえて壁伝いに避難をしなければいけません。

※阪神・淡路大震災後の、町の様子を見る生徒・見学者の方々

※津波が見えたらすぐ避難しないといけません。
一目散に、５階まで駆けあがりました。

（左）
※大阪の津波の新水域を見る
（右）
※さまざまな進化を遂げた防災食
（この機に購入した生徒も‼）

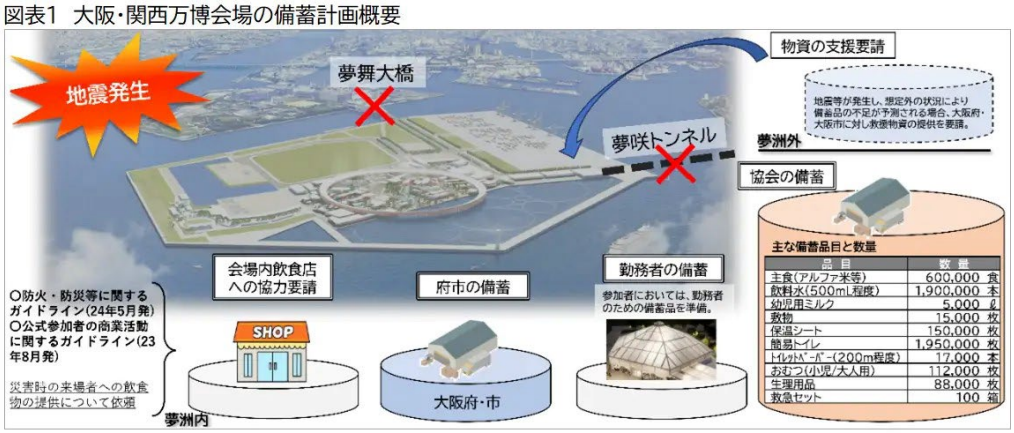


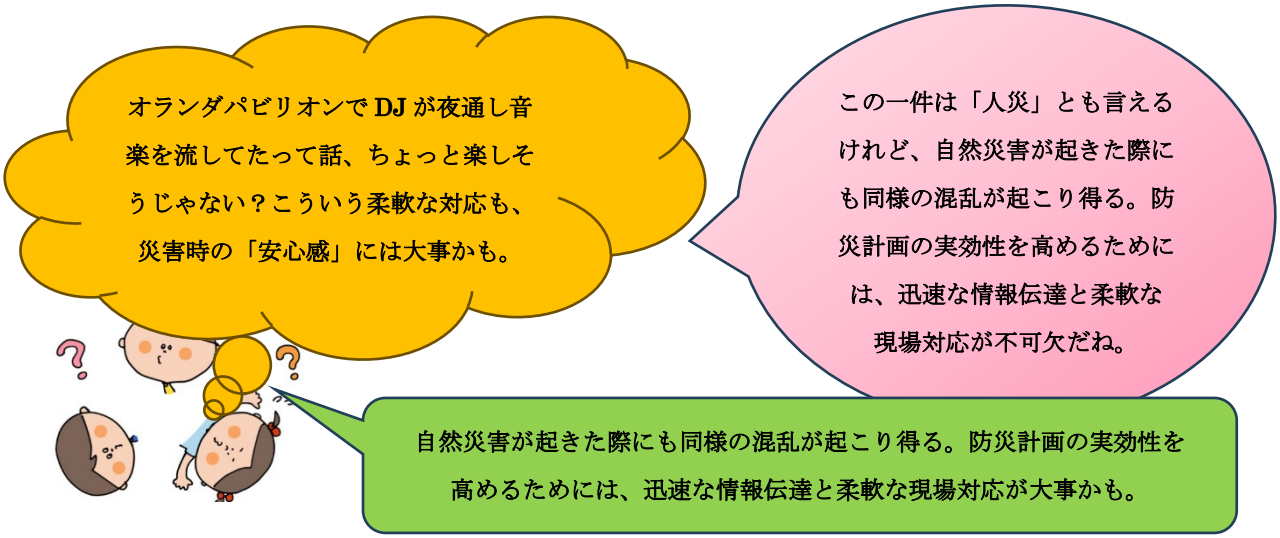
ちょっと…

この夏 8 月大阪・関西万博で起きた帰宅困難者問題は、
まさに「災害時対応の実地テスト」のような状況だったね！

2025 年大阪・関西万博では、8 月 13 日夜から 14 日朝にかけて大阪メトロ中央線の停電により約 3 万人の来場者が夢洲周辺に滞留する事態が発生し、災害時対応の実効性が問われることとなった。万博協会は地震、津波、風水害、猛暑、火災、その他災害の 6 分野を対象に「防災基本計画」と「防災実施計画」を策定しており、最大震度 6 弱の地震を想定した耐震設計や、72 時間の孤立状態に備えた 60 万食分の水・食料の備蓄を行っている。**特に食糧はアレルギーや宗教的配慮も含めて種類別に確保されているという。**（図表 1）

図表1　大阪･関西万博会場の備蓄計画概要



出所:「2025年日本国際博覧会防災実施計画」(概要版)

しかし今回の帰宅困難者対応では、吉村大阪府知事が「災害時と同様の対応」を SNS で発信したものの、実際の物資提供は数時間後の午前 4 時頃に開始され、情報共有の遅れや避難場所の不明確さが課題となった。地下鉄中央線は午前 5 時 25 分に運転を再開したが、4 月にも同線で車両故障による足止めが発生しており、交通インフラの脆弱性（ぜいじゃくせい）が浮き彫りになっている。**この事例は自然災害時にも同様の混乱が起こる可能性を示しており、運営側には防災計画の実効性と対応の迅速性を検証・改善する必要がある。柔軟な現場対応や多言語対応**など、来場者の安全と安心を守るための取り組みが求められるのではないか。